

## 研究の背景とねらい

### 1 研究の背景

幼児児童生徒の「生きる力」の育成に向け、幼児教育から高等教育にわたり、学校教育としての一貫した流れをつくることが求められている。中でも、幼児期から児童期への移行を円滑にすることは、子どもの創造的な思考や主体的な生活態度など「生きる力」の基礎を培うために重要である。さらに、社会の変化に伴い多様化、複雑化する子どもの課題を見通しをもって解決することや、子どもが幼児教育で身に付けてきたものを生かし、よさや可能性を発揮しながら成長しようとする道筋を保証することにもつながる。

この円滑な移行を実現するためには、子どもにかかわる保育者と小学校教師が連携し、幼稚園教育と小学校教育の接続を図ることが不可欠である。平成13年度に出された幼児教育振興プログラムの中でも、幼稚園教育と小学校教育の円滑な移行や接続を図る観点に立って幼稚園と小学校の連携を推進することが述べられている。小学校学習指導要領解説においては、幼児児童生徒の実態や指導の在り方などについて理解を深めることは、それぞれの学校段階の役割の基本を再確認することとなるとともに、広い視野に立って教育活動の改善充実を図っていく上で極めて有意義であることが示されている。保育者と小学校教師は、それぞれの段階における教育の役割を発揮するとともに、互いの教育を接続させるための手段や方法を問い直し、実践することが重要である。

これまでも、幼稚園と小学校の連携、接続を図ることは教育課題として取り上げられてきている。生活科の導入により、幼稚園の環境構成と遊びを通しての総合的な指導を小学校教育につなげる教育課程上の整備、改善もされてきた。しかし、そのことで双方の教育実践が密接になり、子どもの学びや生活が円滑に移行しているかということについては、まだ課題が残されている。連携や接続に関する先行研究を分析してみると「互いの教育内容の理解が不足している」「子どもの見取り方やとらえ方に違いがある」「両者とも連携の必要性は感じているが、実践例は幼稚園側のもが多く、双方向からの発信が少ない」などの結果がでてきている。保育者や小学校教師においては、子どもを介して互いの教育に対する意識や関心をもってはいるが、理解するまでには十分至っていない現状がある。

幼稚園教育と小学校教育の接続を図るためには、円滑な接続を困難にしている要因を探り、接続のあるべき姿とそれを実現するための方策を明らかにする必要がある。

### 2 研究のねらい

以上の背景を踏まえ、研究のねらいを、子どものよさや可能性を生かし、望ましい成長や発達を促すために、「幼稚園教育と小学校教育の接続についての現状と課題を明らかにし、それを改善するための方策を探る」とした。

## 研究の基本的な考え方

### 1 研究主題について

「幼稚園教育と小学校教育の接続を図る」とは、子どもたちの幼児期から児童期への発達を踏まえ、幼稚園教育と小学校教育がそれぞれの役割を果たしながら、教育の内容や方法に連続性をもたせることであると考えた。

また、研究主題に幼稚園教育と表記しているが、本研究では公立幼稚園のみならず、私立幼稚園、保育所も視野に入れている。これは、ほとんどの幼児が、幼稚園や保育所で就学前教育を受けて小学校に入学していること、東京都では3歳児以上の総幼児数のうち、私立幼稚園児と保育園児の占める割合が多いことによるものである。

## 2 接続を図るための考え方

幼稚園、保育所においては、幼児とともに教育環境を創造し、遊びを通して総合的な指導を行う。幼稚園教育要領には、幼児の発達の側面から、ねらい及び内容が5つの領域にまとめ示されている。保育者は、「幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること」「遊びを通しての指導を中心とし、ねらいが総合的に達成されるようにすること」「幼児一人一人の特性に応じ発達の課題に即した指導を行うようにすること」を重視しながら、指導・援助していく。

小学校では、標準授業時数に従い各学校の実態に即して、各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間の学習を実施している。学習指導要領には、教科等ごとに、学年の目標と内容が示されている。小学校教師は、「児童に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かし特色ある教育活動を展開する中で、自ら学び自ら考える力の育成を図るとともに、基礎的・基本的な内容の定着を図り、個性を生かす教育」を目指し、指導・支援していく。

このように幼稚園、保育所と小学校は、それぞれの特質をもって教育活動を展開している。その中で双方の教育を連続させるということは、子どもの育ちや発達に応じて教育活動に広がりや深まりをもたせていくことである。子どもの育ちや発達に応じるためには、互いの教育の目的や特質、教育内容や方法を理解しなければならない。理解することによって、保育者は毎日の保育がどのように小学校以降の教育につながっているのかを考え、また小学校教師は、自分たちの教育が子どもの経験や育ちを生かしているものになっているのかを考え、自らの実践を見直す契機とすることができる。

そこで、本研究では、接続に関する調査を通して、保育者と小学校教師の実践と相互理解の状況を明らかにし、接続を図るためにはどのように連携をすすめていけばよいか、どのように日常の教育活動を工夫、改善すればよいかを示すこととした。

## 3 研究の方法

研究の方法は、次の(1)～(4)の項目に従って進めた。

### (1) 先行研究、各種調査の分析

本研究のねらいと方向を明確にするため、幼稚園教育と小学校教育の接続や連携にかかわる研究や調査についての資料を収集し、本研究とのかかわりを分析した。

### (2) アンケート調査

接続についての保育者、小学校教師の意識と子どもへのかかわり、幼稚園、保育所と小学校の連携の実態を把握するために、アンケート調査を実施した。

〔調査方法〕 質問紙法

〔調査対象〕 幼稚園、保育所の5歳児担任及び小学校1年生担任

〔抽出方法〕 園、学校名簿等からの等間隔抽出法

〔調査時期〕 公立幼稚園、公立小学校は平成14年7月29日から8月20日まで

私立幼稚園、保育所は平成14年10月9日から10月31日まで

〔回収状況〕

	配布数	回収数	回収率
公立小学校	356	354	99.4%
幼稚園、保育所	393	342	87.0%
公立幼稚園	133	131	98.5%
私立幼稚園	130	110	84.6%
保育所(法人立を含む)	130	101	77.7%

〔調査内容〕

接続についての教師の意識

幼稚園、保育所と小学校の連携の実態

### (3) 聞き取り調査

具体的な交流活動や連携の実践事例等の資料収集のため、幼稚園、保育所、小学校に聞き取り調査及び保育や授業の参観等を実施した。

〔調査期間〕 平成14年4月から12月まで

〔調査数〕 国公立幼稚園、私立幼稚園、公立保育所 計12園

公立小学校 9校

### (4) 調査委員会

調査委員会を立ち上げ、調査委員には具体的な事例等の資料提供を依頼し、協議委員には協議を通して助言を依頼した。

第1回調査委員会	(平成14年 6月25日 於：東京都教職員研修センター)
第2回調査委員会	(平成14年 7月26日 於：東京都教職員研修センター)
第3回調査委員会	(平成14年10月11日 於：東京都教職員研修センター)
第4回調査委員会	(平成14年11月26日 於：東京都教職員研修センター)

## 幼稚園教育と小学校教育の接続の現状と課題

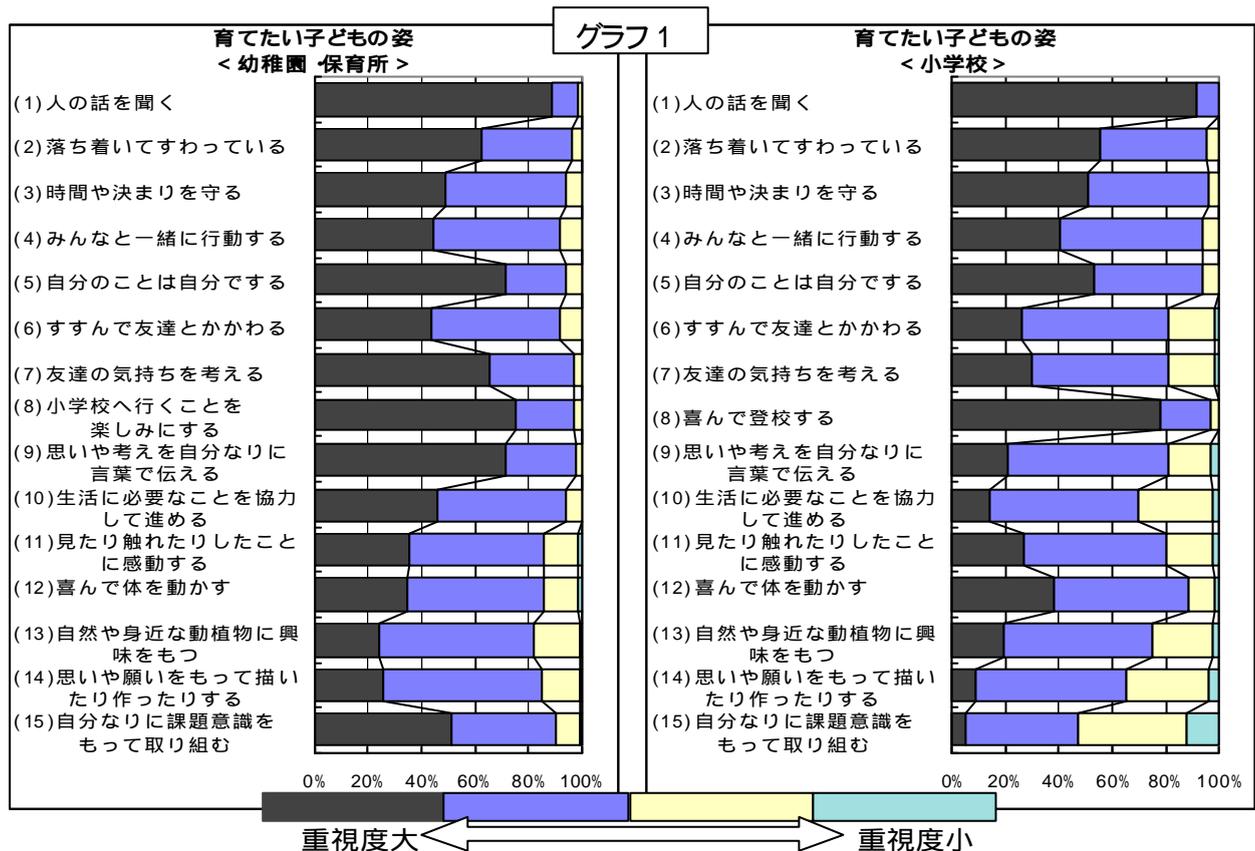
ここでは、保育者と小学校教師の接続についての意識や、連携の実態をアンケート調査及び聞き取り調査から探り、接続の現状と課題を明らかにする。

### 1 接続についての教師の意識と子どもへのかかわり

まず、移行の時期の育てたい子ども像や、指導・援助についての共通点や違い、互いの教育についてのとらえ方を明らかにする。

#### (1) 保育者と小学校教師の育てたい子ども像

グラフ1は、保育者と小学校教師が、幼児（卒園前の2～3月）と児童（入学後の4～5月）の育てたい子どもの姿として重視していることを尋ねた結果である。



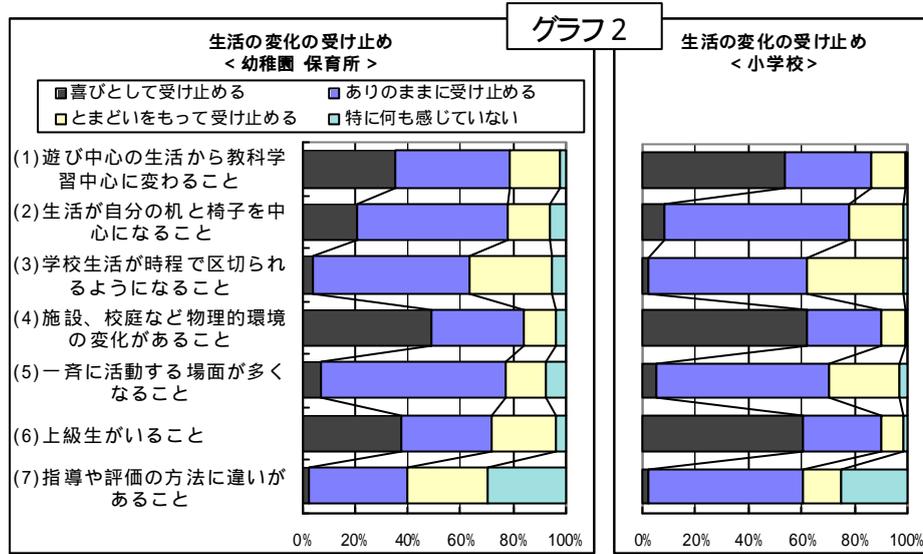
保育者、小学校教師ともに、「(1)人の話を聞く」を全項目の中で最も重視している。次いで「(5)自分のことは自分です」「(2)落ち着いてすわっている」「(3)時間や決まりを守る」が多くなっている。これらの基本的な生活習慣を身に付けることは、両者にとって共通の子どもの課題であり、ともに重視していることが分かる。

また、「(8)小学校へ行くことを楽しみにする（喜んで登校する）」は、両者とも約80%が大変重視していると回答している。小学校に入学することは、子どもにとって大事な節目として、保育者、小学校教師がともに前向きに指導・援助しようとしていることが分かる。

「(15)自分なりに課題意識をもって取り組む」は、保育者の90%以上が重視している傾向にあり、小学校教師の回答数のおよそ2倍となっている。この時期は、幼児が目的意識をもって主体的に行動できる時期であり、保育者がその姿を大事にしていることが分かる。一方、小学校教師は入学直後の時期に、学校生活の基盤を作ることや集団生活に慣れることに指導・援助の重点をおいているため、他の項目と比較すると重視度が低くなっていることがうかがえる。

(2) 生活の変化に対する子どもの受け止め方

グラフ2は、小学校に入学する際に経験する生活の変化を、子どもがどのように受け止めているかについて保育者、小学校教師に尋ねた結果である。



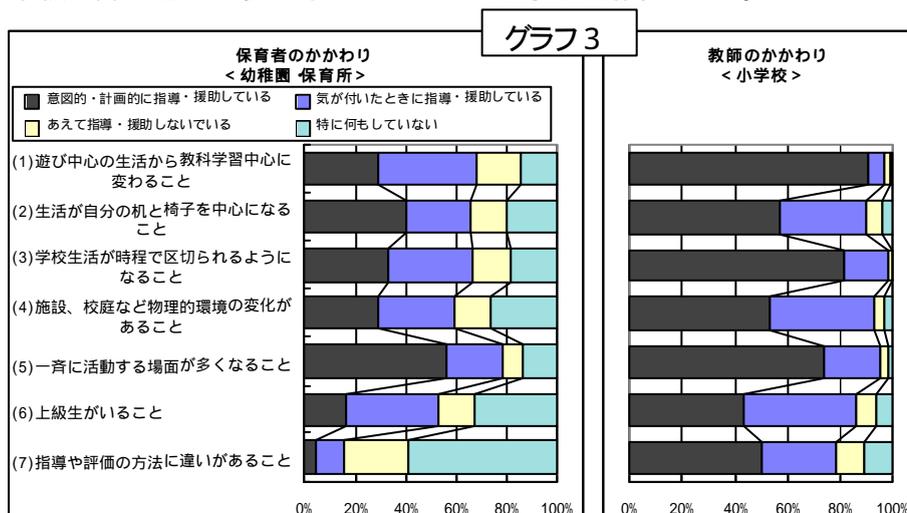
保育者、小学校教師ともに、「(1)遊び中心の生活から教科学習中心に変わること」「(4)施設、校庭など物理的環境の変化があること」「(6)上級生がいること」は、子どもが「喜びとして受け止める」ととらえている。学びや環境が広がることは、両者とも子

どもにとって成長のステップとして肯定的に受け止めていることが分かる。

「(7)指導や評価の方法に違いがあること」について、「とまどいをもって受け止める」と回答した数は保育者が小学校教師の2倍となっている。自由記述には、「幼稚園で個々の育ちが評価されていたものが、小学校では到達度で評価されて、差を感じる」「教科の評価以外でも、子どもを個々に認めて欲しい」「子どもの理解や評価に差がある」などの声があった。指導や評価の違いが、子どもに与える影響を保育者が危惧していることがうかがえる。

(3) 生活の変化に応じた教師のかかわり方

グラフ3は、(2)で述べた小学校に入学した子どもが経験する生活の変化に対して、保育者と小学校教師がどのように対応しているかを尋ねた結果である。



小学校教師は、すべての項目に対して「意図的・計画的に指導・援助している」「気が付いたときに指導・援助している」と合わせて80%以上が答えている。このことから、小学校教師は、入学とともに経験する変化に対して

子どもが少しでも適応できるように、積極的に指導・援助していることが分かる。

具体的な指導・援助の内容(表1)を見ると、保育者は、小学校の生活を予測して細かな配慮をしており、小学校教師もまた学校生活への適応や子どもの発達に合わせた指導・援助をしていることが分かる。

(表1) 指導・援助の具体的実践内容 ( )内の数字は同様の記述のあった数(複数回答)

保育者の具体的な実践内容(記述数285)	小学校教師の具体的な実践内容(記述数243)
1 小学校への理解を深めるために、授業参観や施設見学をする(80)	1 時間の区切りが分かるような意図的な指導をする(35)
2 生活の中で、「時間や時刻」の意識を高める指導・援助をする(62)	2 学習指導に体験活動やゲーム的な要素を取り入れた活動などの工夫をする(28)
3 一斉活動の場を意図的に設定し、集団による行動を意識させる(52)	3 学校生活の決まりや学習のルールが身に付くように指導する(20)
3 日常の保育の中で小学校への関心や期待がもてるような話をする(52)	4 子どもの個性に合わせた対応を心がける(17)
3 床に座った活動から、椅子に座った活動や机に向かった活動を増やす(52) など	5 学習は具体物を使い、操作活動を取り入れて、よく分かるように繰り返し、ゆっくりと指導する(14) など

(4) 接続についての願いや期待

「互いの教育について、また教育のつながりについてどんな願いや期待をもっているか」という問いに対する自由記述の回答結果は以下のとおりである。

<保育者から小学校教師への期待>

- ・自分で考える学習、個々の創造性や表現力を養う授業をしてほしい
- ・子どもの主体的な力、意欲や自信、技能等を発揮できるような場面設定がほしい
- ・個が活躍できる場づくりをしてほしい
- ・対話の時間をつくり、子どもの気持ちを受け止めてほしい
- ・子どもの育ちや発達を見て、指導・援助してほしい
- ・自分たちでできるように育てている部分があるので、1年生を幼く扱わないでほしい
- ・保育内容や指導、幼児理解の方法を知ってほしい
- ・保育の様子を参観し、保育者が大切にしていることを見てほしい

<小学校教師から保育者への期待>

- ・文字指導など小学校の先取りをしないでほしい
- ・自然体験や感動体験を十分させてほしい
- ・話を聞く、椅子に座る、全体の約束を守るなどの集団生活のルール、あいさつ、持ち物の扱い、整理整頓などの基本的な生活習慣を身に付けてきてほしい
- ・子どもが興味のないことにも取り組ませてほしい

(1)から(4)の結果から、接続についての両者の意識と子どもへのかかわりについて考察する。

育てたい子ども像については、保育者、小学校教師ともに基本的な生活習慣を身に付けることを重視しており、子どもの生活面における共通の問題に取り組んでいることがうかがえる。また保育者、小学校教師とも学校生活に適應できるように積極的に指導・援助している様子があり、どちらも移行を意識して努力している様子が分かる。

しかし、子どもの姿をどのように見取り、何をねらいにして指導・援助を工夫しているかなど、互いの教育内容や取り組みについては相互理解が十分でないことが明らかになった。

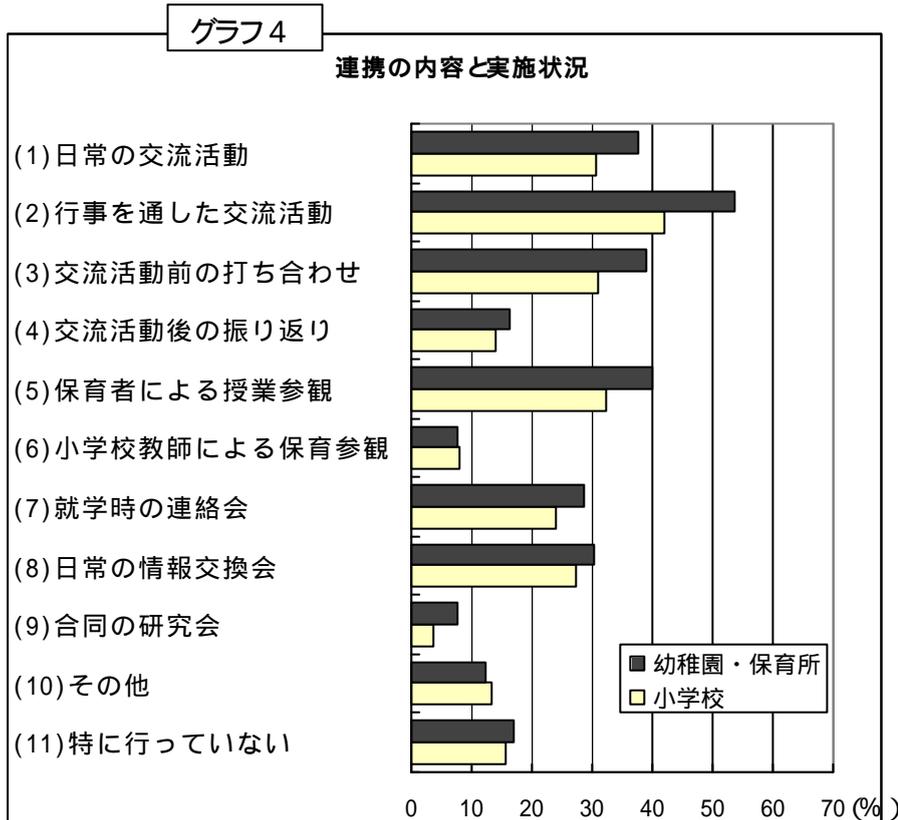
## 2 幼稚園・保育所と小学校の連携の実態

保育者と小学校教師が、子どものとらえ方や互いの教育内容を理解するためには、子どもの実態を中心にすえ、話し合うための時間と場の共有が必要である。

ここでは、連携の現状や、保育者と小学校教師の連携に対する意識について、アンケート調査及び聞き取り調査から明らかにする。

### (1) 連携の内容と実施状況

グラフ4は、現在、幼稚園、保育所と小学校でどのような連携をしているかについて尋ねたものである。



「(1)日常の交流活動」「(2)行事を通じた交流活動」が30%~40%と、連携の中では多く行われている。

「(3)交流活動前の打ち合わせ」と比較すると、「(4)交流活動後の振り返り」は約半数の割合である。交流活動を行うに当たっては、何をどのようにすすめるかなど、活動前の打ち合わせに重点がおかれていることが分かる。

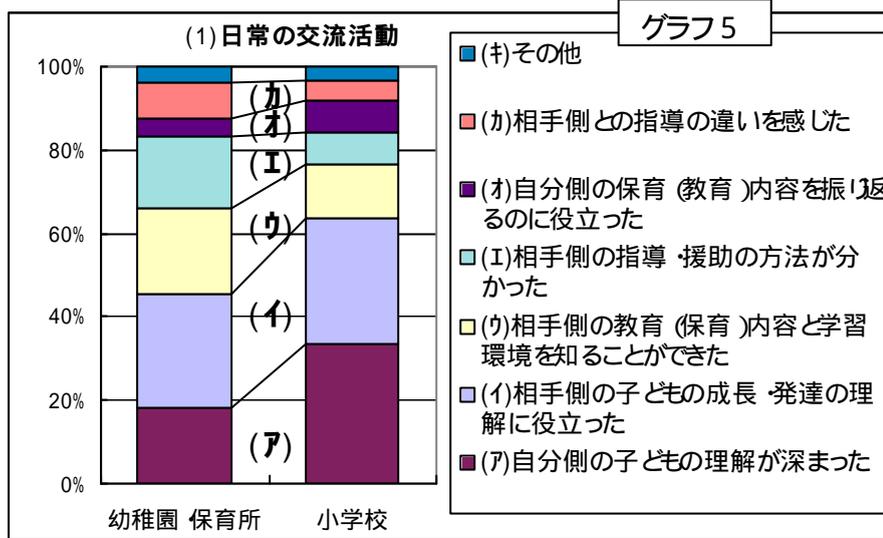
「(5)保育者による授業参観」は40%近く実施

されている。しかし「(6)小学校教師による保育参観」は10%にも満たない。保育者は「保育の内容や様子を見てもらいたい」ことを強く望んでいる(自由記述より)が、実際には小学校低学年の教師は、関心はもっていても保育参観のための時間を確保できない状況がある。

「(7)就学時の連絡会」「(8)日常の情報交換会」は、全体の30%弱である。この内容にかかわる自由記述では、保育者から、「子どもの育ちを伝えたい」「入学後の子どもの様子が知りたい」とある。小学校教師からは「子どもの発達や実態について共通理解をし、入学時の指導や子ども理解に生かしたい」という声と、一方「入学後は新たな見方で子どもをとらえたい」という声が出ている。両者とも、子どもを理解し、よりよく育てたいという思いは同じであることが分かる。

次にそれぞれの連携によって得られたことを、グラフの読み取り及び聞き取り調査の結果から考察する。

交流活動によって得られたこと



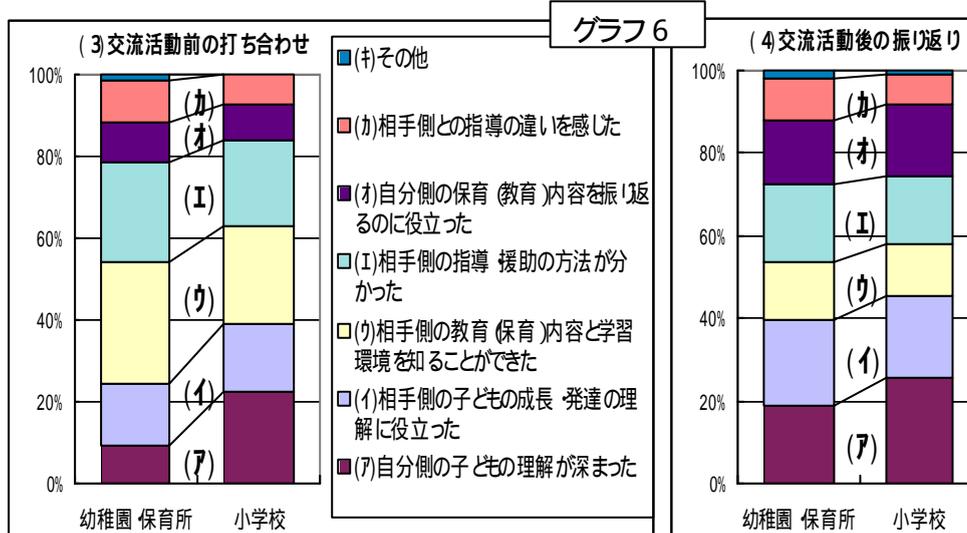
グラフ5によると、交流活動を行うことによって、「(ア)(イ)自分側・相手側の子ども理解が深まった」と両者ともとらえている。特に小学校教師は、相手側の幼児の理解と同じくらいの割合で、毎日接している児童への理解を改めて深めている。

聞き取り調査の結果では、幼児が「小学生への安心感

や憧れ、信頼感をもつようになった」、小学生には「年齢が下の子に対する思いやりの言動や日常にはない新たな一面が見られた」などの声が多く聞かれ、交流活動は、子どもの成長に望ましい影響があると言える。

さらにこのことは、一回限りの交流を行った園や学校より、年間計画に位置付け継続的、計画的に行っている園や学校の保育者、小学校教師の方が強く実感していることが分かった。

交流活動に伴う打ち合わせと振り返り



グラフ6によると、(3)交流活動前の打ち合わせでは「(ウ)(エ)相手側の教育内容・学習環境、指導・援助の方法が分かった」が高い割合を示している。

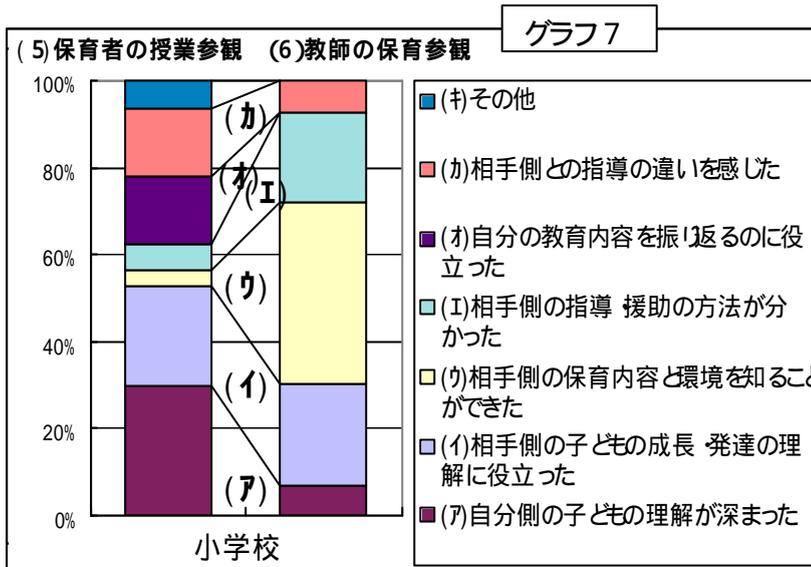
また、(4)交流活動後の振り返りでは、「(ア)(イ)自分側・相手

側の子どもの理解が深まった」、さらに「(オ)自分側の教育(保育)内容を振り返るのに役立った」の割合が高くなっている。

交流活動後に振り返りを行っている幼稚園、保育所での聞き取り調査からは、「活動内容と事前の準備、当日の指導が十分であったかを検討できた」「話し合いの中で指導・援助のねらいと内容、子どもの見方とらえ方の共通点や相違点などを実感した」などの報告があった。

このことから交流活動を行う際には、活動に向けた事前の打ち合わせと活動後の振り返りをもとに行うことで、双方の物理的な環境等の違いだけでなく、幼児と児童の成長や発達について理解を深めたり、互いの指導・援助の仕方を学んだりすることにつながることが分かった。

保育参観・授業参観



グラフ7は小学校教師の集計である。保育参観することによって、「(ウ)(エ)保育内容と環境、指導・援助の方法」が分かったと実感している。

小学校教師の保育参観の割合は低いものの、実際に保育を参観した小学校教師からの聞き取り調査では、「幼児が個々に工夫しながら自分のつくりたいものに取り組んでいた」「基本的な生活習慣が定着していない子ども

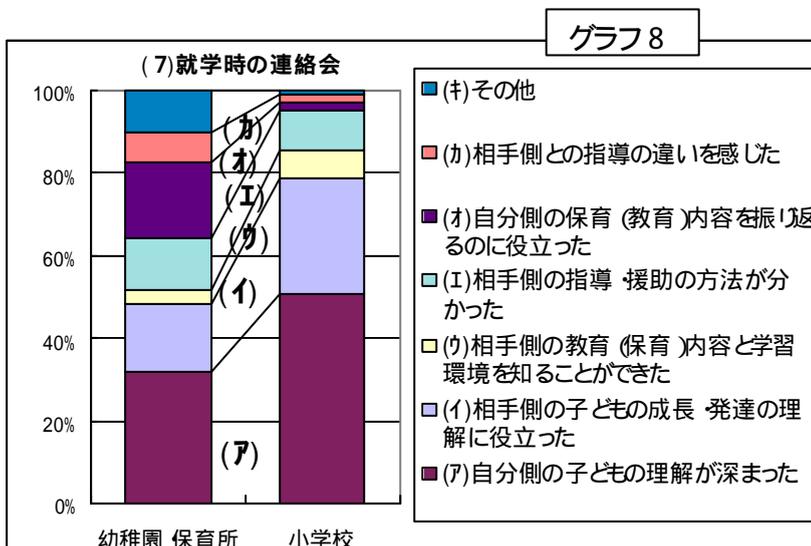
や、ルールを正しく理解していない子どもに、個別にしかも具体的に指導している」「きめ細かく指示している」「子どもの視線に立ち、表情を確かめながら話している」などが挙げられた。

また、「(オ)自分の教育内容を振り返るのに役立った」という観点からみると、小学校教師が保育参観するよりも、保育者に授業を参観してもらう方が自己の振り返りへの機会になっていることが分かる。実際に保育者に授業参観をしてもらった学校への聞き取り調査によると、参観後に感想をもらったり、後に合同の研究会を行ったりすることで、「子どもの実態や授業の評価を新たな観点でとらえ直すことができた」「校内の教師同士ではなかなか気付かなかった子どもの見方や考え方を知ることができた」などの報告があった。

なお、保育者の集計においても、「小学校の教育内容と環境、指導・援助の理解」「自分の保育内容の振り返り」について同じような傾向が見られた。

これらのことから、互いの保育や授業を参観する機会を積極的に取り入れることは、幼児、児童の理解を深めるとともに、保育者、小学校教師が自らの指導の在り方を振り返ることにつながるということがわかった。

就学時の連絡会



グラフ8によると、両者ともに「(ア)(イ)自分側・相手側の子ども理解が深まった」と考えており、小学校教師は特に割合が高い。しかし、グラフ4にあるように、連絡会や情報交換会の実施状況は、およそ30%である。

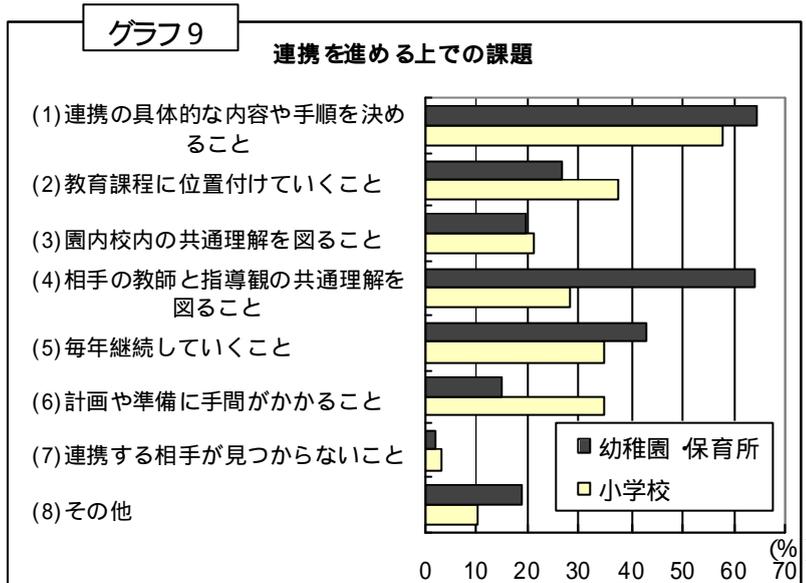
就学時の連絡会を例にとると、小学校教師からは「子どもについての先入観をもちたくない」という声が聞かれるが、保育者

は「一人一人の子どもの育ちを伝えたい」という思いがある。この違いが、連絡会の必要感の差につながっていることがうかがえるが、実際に行っている小学校教師は効果を感じていることから、連絡会をもつことについて見直しを図る必要がある。

また、就学時の連絡会と同じく、「日常の情報交換」も、特に子どもを受け入れる小学校教師にとって、子ども理解や指導・援助の理解に大きく役立っており、推進していかなければならない連携の内容の一つである。

(2) 連携に対する教師の意識と課題

グラフ9は、連携を進めていく上で保育者と小学校教師が課題としていることを尋ねたものである。



幼稚園、保育所、小学校ともに「(1)連携の具体的な内容や手順を決めること」を課題としている割合が多く、続いて「(5)毎年継続していくこと」「(2)教育課程に位置付けていくこと」となっている。

このことから、連携の内容を決めることや計画的、組織的な連携が確立していない実態が見えてくる。

「(4)相手側の教師と指導観

の共通理解を図ること」は保育者と小学校教師に2倍近くの差がある。「(6)計画や準備に手間がかかること」については、小学校教師の方が多くなっている。

このことから、保育者と小学校教師の連携に対する意識の違いが見えてくる。これらの差が接続を図るための連携を取りにくくしている原因になっているとすると、指導観を共通理解するための方策、計画や準備を円滑にすすめていくための方策が必要である。

「(8)その他」の記述には、「連携の必要性を感じてもらえない」「様々な園や保育所から子どもが来るので、連携の仕方が難しい」などがあつた。

(1)と(2)の結果から、連携の実態について考察する。

連携のどの内容についても実施数は多いとは言えないが、連携したことによって、子どものとらえ方や指導・援助の理解などに役立っていると、両者とも感じている。また、連携の計画を立て、内容や手順を考えることが課題となっていて、連携することによって何を指すのか共通理解されていない現状が浮かび上がってきた。

## 幼稚園教育と小学校教育の接続を図るための方策

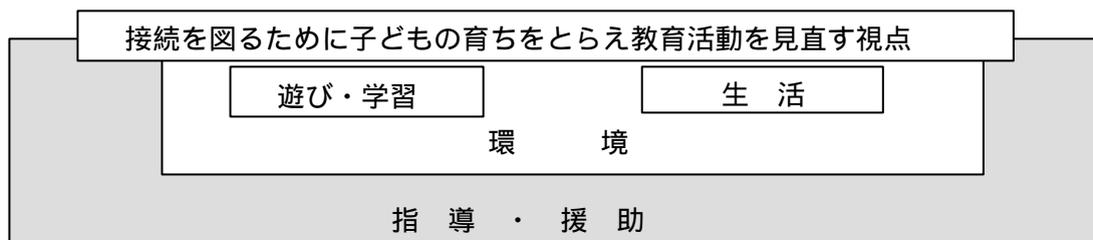
アンケート調査等の結果から、保育者と小学校教師はそれぞれに移行を意識して取り組んでいるが、互いの教育活動を十分に理解しているとは言えないこと、子どもの育ちや教育の相互理解を深めるための連携は、全体的には実施数が少ないことやその目的が共通理解されていないことなどの課題が明らかになった。

これらのことから、保育者や小学校教師がそれぞれの役割を果たしながら、教育の内容や方法に連続性をもたせるためには、両者が向き合い、理解を深めることができる共通の視点が必要であると考えた。

そこで、幼稚園教育要領と小学校学習指導要領、それぞれの指導計画、活動の実践記録等の見直しを通して、幼稚園教育の指導内容や方法の中から、小学校教育に関連し、なおかつ生かしていくことができる要素を探り、「遊び・学習」「生活」「環境」「指導・援助」の4つを導き出した。この要素は、アンケート調査の自由記述を整理する中で、双方の教育活動や互いへの期待として浮かび上がってきた共通のキーワードでもある。また、実際の連携においても、両者の話し合いの焦点になっていたものである。

子どもの育ちをとらえ教育活動を見直すため、「遊び・学習」「生活」「環境」「指導・援助」の4つの要素を視点とすることにより、接続を図る観点に立った連携や教育実践が可能になる。一つ一つの要素は、教育活動において常に必要なものであるが、その具体的な内容は、双方の教育活動の特質や活動のねらいなどによって違ってくる。したがって、保育者と小学校教師がこれらの要素を視点として話し合うことにより、双方の教育の共通点や相違点が明らかになるとともに、子どもの育ちや具体的な実践が見えてくるのである。

なお、「環境」は「遊び・学習」「生活」を支え、保育者と小学校教師の「指導・援助」は「遊び・学習」「生活」「環境」のすべてを支えているととらえた。



これら4つの視点をもつことを常に基本とし、接続を図るための2つの方策を提案する。

- 1 子ども理解、教育活動の相互理解が深まる連携をすすめる
- 2 子どもの育ちや互いの教育実践を生かした保育や授業を工夫する

2つの方策は相互に関連している。保育者と教師が子どもをよりよく育てたいという共通の目的のもと話し合いを繰り返すこと、そして互いを意識して日常の保育や授業を実践することのどちらも必要である。これらに関係付けながら積み重ねていくことによって、教育を連続させることの意味が具体的な子どもの姿として保育者と小学校教師に理解され、接続が実現すると考えた。

次に、上記に述べた接続を図るための2つの方策の具体的内容を、実践事例を提示しながら述べることとする。

## 1 子ども理解、教育活動の相互理解が深まる連携をすすめる

教育の内容や方法に連続性をもたせるために、連携は有効な手段である。そして保育者と小学校教師が、子どもをどのようにとらえ、どのような教育活動をしているのかを互いに理解し、教育を連続させるための工夫を確認し合っていくことにより、望ましい連携となる。

また連携は、計画的に行い回数を積み重ねることによって、より効果があることを保育者も小学校教師も実感している。園や学校の特色や実態に応じて、できるところから始め、継続していくことが重要である。そのための3つの具体的な提案について、事例をもとに述べる。

### (1) 保育者と小学校教師が4つの要素を視点として話し合う

子どもの活動状況や日常の様子を、視点を決めて話し合うことにより、子どもの育ちや発達を理解するだけでなく、互いの考え方や教育実践が具体的に見え、自己の教育を見直すことにつながる。

<指導・援助を視点として話し合った事例 - 交流活動後の振り返りの場面 - >

1年生と年長児の交流活動3回目「いっしょにあそぼう」でドッジボール遊びをしている。A児の顔に小学生の投げたボールが当たり、泣き顔になる。その様子を見ていた保育者は、ゆっくりとA児のそばに行き「強いね、Aちゃん。痛かったのに我慢したんだね。ボールに当たらないように上手に逃げていたね。がんばっていたのを見ていたよ。」と声をかける。その後、A児は楽しそうにドッジボール遊びを続け、上手に逃げられたときには、保育者に笑顔を向けていた。活動の終わりには、「当たらないで逃げられた。楽しかったからもっとやりたい。」と自ら感想を伝えてきた。

話し合いの中で保育者から、幼児の活動を見守り必要に応じて援助しようと考えていたことやA児が当たらないように逃げていた様子をとらえ「がんばっていたね。」と声を掛けたことが報告された。小学校教師は、保育者の言葉掛けを聞き、幼児の表情やつぶやき、動きなどを見守っていることに気付いた。子どもが本当に必要とした時に心に寄り添う援助を行い、子どもに安心感をもたせることで、活動が充実することを保育者から学んだ。また保育者からは、小学校教師が簡潔で適切に指示をしていたことが出され、話を聞く姿勢を身に付けることは話をする側の工夫が必要なことを理解し合うことができた。

このように、保育者と小学校教師が、指導・援助という視点に着目し、具体的な活動場面を取り上げて話し合うことで、互いの子どもの見取り方やかかわり方を理解することができる。また、子どもの成長や実態に応じた指導・援助のよさを学び合うことで、自己の指導・援助を振り返るきっかけになるのである。ここに、時間を確保して活動の振り返りをもつ有効性が見えてくる。

### (2) 連携を年間指導計画に位置付けていく

(1)で示した交流は、時期と回数を4月当初に計画し繰り返し行ったことで、幼児は小学生に憧れをもちボール投げを練習し、児童は幼児に手紙を書くなど、子どもの主体的な遊びや学習につながっていった。年度や学期の初めに打ち合わせをもち、いつどのような交流活動や連絡会、保育参観や授業参観、研究会等を行うかを考え、年間計画に位置付けることにより、継続

的な連携になっていく。その際、教育課程や年間指導計画を示し合い、園や学校の教育活動が少しでも伝えられるようにする。

また限られた時間の中で効果的な連携をしていくためには、何のためにその活動を行うかというねらいを明確にしておくことが必要である。

< 交流活動を年間指導計画に位置付けた小学校の事例 >

<p>A 小学校 幼稚園との交流活動計画</p> <p>1 年生 「学校の周り」近くの公園で、一緒に活動する。 「幼稚園の子と仲良くなろう」10～2月交流5回</p> <p>2 年生 「秋がいっぱい」年長児と公園に行き自然を楽しむ。。</p> <p>3・4 年生 「縁日をしよう」縁日に年少児を招待する。</p> <p>5 年生 「一緒に遊ぼう」年長児とプールで遊ぶ。</p> <p>6 年生 「ボランティア活動に挑戦しよう」年中児と交流</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・この学校では全学年の年間指導計画に位置付けている。</li> <li>・生活科、総合的な学習の時間、特別活動などや給食、休み時間などを使い、交流活動を設定している。</li> </ul>	<p>3回目の活動 打ち合わせ内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・活動のねらいを共通理解する 幼児にとってのねらい 児童にとってのねらい</li> <li>・活動内容と配慮事項を確認する</li> <li>・子どもについて情報交換をする</li> <li>・活動の記録について話し合う</li> <li>・当日の役割分担をする</li> <li>・活動についての指導・援助を明確にする</li> <li>・交流活動の振り返りを計画する</li> </ul>
---	---

一つの交流が次の活動につながるように、打ち合わせや振り返りを行ったり、その後の子どもの様子について情報交換をしたりすることが大切である。

また、この学校では、年長児と1年生だけでなく、他の学年とも交流する機会を計画的にもつことにより、園や学校が組織全体として連携を推進するようになっていった。このことは、接続を5歳児の3月から1年生の4月という狭い意味でとらえるのではなく、子どもの経験を長期的にとらえ、連続させることを可能にする。

(3) 相互理解を深めるための準備や方法の工夫をする

子どもの具体的な姿を通して教育内容や指導観を理解し合うには、子どもの実態や活動経験がわかる資料、指導計画、活動案、活動の記録用紙等を用意し、互いが具体的実践の情報を共有し合い、願いや思いを伝えるとともに、実態に応じた指導を工夫する必要がある。

< 保育参観を通して合同研究会の中で理解を高めた事例 >

B 幼稚園では、園内研究の保育の際に、保育指導案（保育者の見取りと課題の記入を含む）、記録用紙、研究協議会の会次第を小学校教師に配布している。記録の対象は、「観察対象児」「周りの幼児」「保育者」「学級全体」とし、小学校教師も保育者とともに分担する。

研究協議会では、「観察対象児はどのように活動したか、それはなぜか」「保育者の指導・援助はどうだったか」「今後の課題」「家庭との連携」について協議した。幼児の見取り方や指導・援助についての意見交換により、保育者、小学校教師の子ども理解の幅が広がっていった。

時間の確保が難しい状況の中で理解を深めるために、ビデオによる記録を活用して話し合う、参観の感想や疑問をファクシミリで伝え保育者が答えるなど、互いの創意工夫が必要である。

## 2 子どもの育ちや互いの教育実践を生かした保育や授業を工夫する

保育者と小学校教師は、視点を明らかにした連携を重ねることによって、子どもの育ちや互いの教育活動について具体的な気付きをもつことができる。これまでの子どものとらえ方や自分自身の指導・援助の在り方を見直し、教育活動の幅が広がることを期待できる。

接続を図るためには、連続性を踏まえた教育内容を、実践していくことが必要である。子どもの学びの経験や育ち、実践されている教育活動を踏まえて保育や授業の展開を工夫することにより、子どものよさや可能性を生かすことができる。

さらに、両者が、幼稚園教育と小学校教育の特質やそれぞれの教育課程の全体像をとらえておくことが重要である。そのことによって、ある特定の活動に限られた接続ではなく、長期的に子どもの発達を踏まえて接続を考えていくことになる。

以下に、「遊び・学習」「生活」「環境」について、幼児期からの経験を生かし、授業を工夫した事例と小学校の活動につながることを意識した保育の事例を述べる。

### <遊び・学習の事例 文字や言葉について >

C小学校の教師が、近隣のD幼稚園の一斉保育で、しりとり遊びや言葉集めゲームを行ったり、かるた作りで絵や言葉を書いたりしながら、言葉に対する感覚を育てていることを知る。そこで国語のひらがなの学習で、ひらがなの使い方を一文字ずつ確認しながら、言葉集めゲームや簡単な文づくりをして、文字を書く学習への意欲を高めた。幼児期に親しんできた言葉や文字についての経験を生かし、言葉を児童なりに伸ばしていくことができる場や機会を設定する必要がある。

一方、D幼稚園の保育者は、小学校の国語の授業で子どもが作った文を全体の前で発表する場面を見る。その際、児童の伝えたいことが何であるか、教師が共感したり、聞き返したりしながら、適切に書くことへ関連付けていることを知る。また、小学校では、クラスの中で発表する機会が多くあることに気付き、遊びや生活の中で発見したことや楽しかったことを保育者や友達、みんなの前で話す機会を意図的に設けるようにした。

保育者は幼稚園教育要領に基づき、遊びや生活の中で、幼児が文字に対する興味・関心をもつことができるよう語いを増やしたり、表現することの楽しさを味わわせたりしている。小学校では、入門期にひらがなを読んだり書いたりする学習が始まる。

どちらも子どもの「読みたい」「書きたい」という意欲を喚起し、自発的な学びにつながるように、活動内容や方法を工夫していくことが求められる。

幼稚園教育要領 「言葉」 抜粋  
「日常生活の中で文字などで伝える楽しさを味わう」  
・文字などを使いながら思ったことや考えたことを伝える喜びや楽しさを味わい、文字に対する興味や関心をもつようにすること。

小学校学習指導要領解説「国語」第1・2学年 抜粋  
B 書くことの能力を育てるため次の事項について指導する。  
相手や目的を考えながら書く、書こうとする題材に必要な事柄を集める、簡単な組み立てを考える、事柄の順序を考える、文章を読み返す習慣を付ける。  
・入門期の指導としては、書くことを楽しみ、書くことに親しむことが第一の目標である。

<生活の事例 見通しをもって自分でする力を育てる >

見通しをもって生活する工夫は幼児期から行われている。E 幼稚園の5歳児の1月頃には、朝と帰りの集まりで一日の流れや週の予定を知らせている。片づけの時刻を示した時計や予定を記入したカレンダーなどの環境を用意する。

「今日は、先に当番活動をしてから絵を描こう。」など、

幼児が自分で自分の生活を組み立てるようにしている。F 小学校の教師は、保育者との情報交換の中で幼児のこれらの経験を知り、小学校でもチャイムに頼らず時計を見て自分で行動できるように指導・援助した。児童がよく見える場所に時計を置いたり、予定表の示し方を工夫したりした。その結果、児童が自分から時刻を意識した生活をするようになった。

小学校では保護者の送り迎えがなく家庭への連絡は子どもを通じて行うことが多い。これについてF 小学校の1年生担任から、入学時の子どもへの指導や不安をもつ保護者への対応に苦労しているという話があった。そこでE 幼稚園の保育者は、就学時健診が行われる頃から、降園時に保護者への連絡を自分で行うことができるよう「伝言ゲーム」などの工夫をした。また、学級便りで生活の様子を知らせ、保護者に子どもが自分で報告することの必要性について理解してもらうように工夫した。

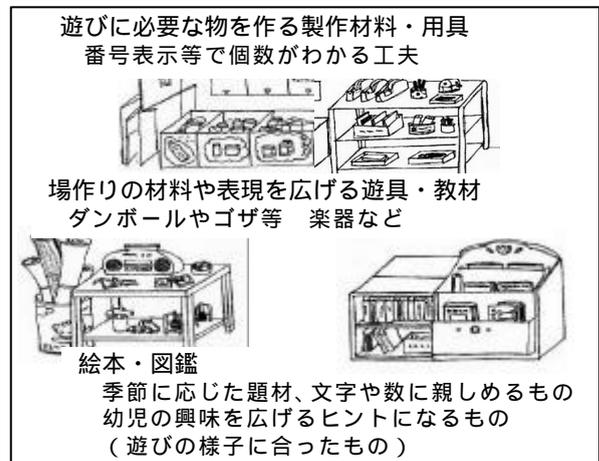
このように保育者と小学校教師が、子どもの生活の実態を語り合い、生活の自立の具体的な方法を学び合い、実践することが大切である。



<環境の事例 自分から遊び・学習に取り組むための工夫 >

幼稚園教育は、環境を通して行う教育である。

幼児が自分から遊びに取り組むことができるような環境を工夫している。例えば、遊びのイメージを膨らますために、製作の材料や用具、リズム遊びや踊りの表現に使う楽器や音楽、絵本、ままごとの道具などの素材や用具を身近に置いている。また、壁面は幼児自身が動かすことのできるもの、季節感を味わえるものなどを貼り、常に遊びや生活に生かせるようにしている。



小学校教師も学習課題や教材に応じて、学習環境に配慮している。G 小学校の1年担任は、保育参観で幼稚園の環境づくりを学び、これから学習する教材に関する絵本や図鑑を教室に置いたり、休み時間に算数の学習につながるような玉入れゲームを用意したりするなど、環境の工夫について学年会で話し合った。

どのような活動をするに当たっても、子どもの意欲を喚起し、自ら学ぶ必然性をもたせていきたい。そのために、様々な環境の工夫を取り入れ、意図的・計画的な環境構成をしていくことが大切である。

## 研究の成果と今後の課題

### 1 研究の成果

- (1) 保育者と小学校教師対象のアンケート調査を実施したことにより、接続についての、保育者と小学校教師の意識や実践の現状を明らかにすることができた。

保育者も小学校教師も、子どもの発達や生活への適応を考え、創意工夫して教育活動を行っているが、互いの教育活動を十分理解しているとは言えない。

連携の実施数は多くはないが、実施した園や学校においては、子どもや互いの教育への理解に役立ったと実感している。しかし、こうした連携に対しては、内容や手順の設定、時間の制約などが課題となっている。

- (2) 幼稚園教育の指導内容や方法の中から、小学校教育に関連し、なおかつ生かしていくことができる要素として「遊び・学習」「生活」「環境」「指導・援助」の4つを導き出し、それを共通の視点として、接続を図るための2つの方策を提示することができた。

第一は、子ども理解、教育活動の相互理解が深まる連携をすすめる。

第二は、子どもの育ちや互いの教育実践を生かした保育や授業を工夫する。

これらの方策に基づいて実践した事例を分析したところ、以下のことが明らかになった。

保育者と小学校教師の子どものとらえ方や教育活動における共通点と相違点を、実践の事実に基づいて理解し合うことができる。

4つの要素を視点として子どもの育ちや互いの教育活動を見直すことにより、子どもの見方を広げ、自らの保育や授業の工夫につなげることができる。

### 2 今後の課題

- (1) 接続を図るために提案した4つの要素を視点として、幼児期から児童期への子どもの発達を踏まえた教育課程を提示する。

- (2) 園や学校だけでなく、子どもの発達や成長を見守る保護者や地域の視点を入れた、接続のための方策を探る。